

日仏高等学校ネットワーク-コリブリ友の会主催
日仏高等学校ネットワーク-コリブリ責任者のための研修

2016年4月1日（金）12時より
於パリ日本文化会館 レセプションホール（5階）
101, bis quai Branly, 75015 Paris

参加者：

professeur	Satoshi SAKAI	Magendie	Bordeaux		1
professeur	Julien FAURY	7 mares	Maurepas 78		2
Professeur	Lionel Seelenbinder-Merand	La Fontaine	Paris		3
professeur	Mari ENDO	Bartholdi	Colmar		4
professeur	Gilles BIEUX	- Henri Vernant - Paul Langevin	Sèvres 92 Suresnes 92		5
professeur	Nathalie ROUILLE	Rocroy Saint Vincent de Paul	Paris		6
professeur	Hiromi HORIYA	Nevers	Montpellier		7
professeur	Yoko MAEDA	Montebello	Lille		8
professeur	Maki TERADA	Jules Guesde	Montpellier		9
professeur	Akiko MARC	St Laurent la Paix Notre Dame	Lagny 77		10
professeur	Atsuko FURIHATA	Saint Exupéry	La Rochelle		11
professeur	Yumi SASAKI-DANIEL	Sévigné	Rennes		12
professeur	Junko TAKAHASHI	International Saint Germain	St Germain en Laye		13
MDC	Gerald PELOUX	Univ. Cergy-Pontoise	Paris		14
Chef d'établ.	Myriam LE DREZEN	Sévigné	Rennes		15
-----	-----	-----	-----	-----	
Président	Tsutomu SUGIURA	MCJP	Paris		16
1 ^{er} Secr.Amb.	Kohei OKAWA	Ambassade du Japon	Paris	16 :15-	17
	Kazuko AKIMICHI	Ambassade du Japon	Paris		18
Sous-Dir. DREIC	Judikaël REGNAUT	MENESR	Paris		19
Dir. Adj.	Atsunobu NOGAMI	Jalpack	Paris		20
Dir. général	Yoichi ARAI	CLAIR Paris	Paris		21
	Sawako NEMOTO	AEJF (フランス日本語教師会)	Paris		22
	Chizuru KITAI	AEJF (フランス日本語教師会)	Paris		23
Colibri Japon (Coordinateur)	Shigeru NAKANO	早稲田大学高校学院 Lycée de l'Université Waseda	Tokyo		24
Pdt	Aude SUGAI	Colibri France	Paris		25
Secr. Général	Yoko ISHII	Colibri France	Paris		26
	Yasuo SUGAI	Colibri France	Paris	17 :30-	27
Resp. Lgue Jap	Mihoko KOBAYASHI	MJCP	Paris		28
Conseillère	Yuko FUJIMITSU	MCJP	Paris		29
Assistante	Naoko TAKEDA	MCJP	Paris		30
Stagiaire	MarineMoiny	MCJP (INALCO)	Paris		31

この報告書は議題に沿わず、内容ごとに整理し、まとめた。

✓パリ日本文化会館 杉浦館長挨拶

まず、参加者への歓迎の辞を述べ、当会館の政策事業の一つである日本語講座を通して、日本語教育ならびに日仏文化交流の振興を目指している。日仏関係の将来を担う若い世代、特に高校生に期待している。3月5日のスピーチ・コンクールでのコリブリ学生の発表の素晴らしさに印象深くした。日仏高等学校ネットワーク・コリブリの活発な活動には大いに敬意を表し、協力を惜しまない。その意志の具体化として国際交流基金安藤理事長とパリ日本文化会館杉浦館長の名のもとに「国際交流基金さくらネットワークメンバー」である証書がコリブリーフランスの須貝会長に授与された。（杉浦館長の挨拶全文の仏語の書き起こしが本報告書の最後に掲載されている。Le texte intégral de l'intervention se trouve en fin de compte rendu.）

✓須貝会長より国際交流基金のさくらネットワークメンバーになった経緯について。

昨年パリ日本文化会館よりコリブリ・フランスに「さくらネットワーク」のメンバーになってほしいのだがと招待を受けたので、メンバーになるべく申請を行い、受理された。パリ日本文化会館/国際交流基金には3年前より会場提供、また我々のプロジェクトの資金援助など多大な支援をいただいている。感謝の意を表す。

✓参加者紹介 各自氏名所属先を紹介。

✓フランスにおけるネットワークの現状

◆本年度入会した高校はコルマルのバルトルディー高校。配布資料に加盟校リストがある。サイトにもリストが載っている。もう一校ロリアン（Lorient）のサン・ルイ高校が入会を希望しているが、本年度は入会不可能。加入の際には翌年の研修会に担当教師が出席し、コリブリの機能をよく理解し、コリブリメンバーと交流できる状態になることが必須条件である。

◆このようにフランスの加盟校の増加に伴いフランス人の交換留学希望学生はさらに増加する可能性がある。それに比して、日本人学生の候補者が少ないのが問題である。さらに、フランスのテロの問題も加担し、フランス人学生の交換留学のチャンスが少なくなる恐れがある。日本側の加盟校の増加を期待したい。

◆交換留学終了後、提出が義務付けされている日本滞在レポートに関する今年の問題点は、バカロレアの NOTION に関連付けたレポートでなければならないことだった。それは決して簡単なことではないが、結果的にはかなり成功したレポートがあった。

◆昨年よりコリブリ交換留学した学生より選抜された4名の学生がパリ日本文化会館のスピーチコンクールの場で日本滞在についての発表をしているが、昨年も今年も当会館より非常に良い評価をいただいている。そして、パリ日本文化会館は将来的にコリブリ向けの何らかのイベントを開催したい意向である。この種のプロジェクトは学生のモチベーションを高めるものであり、我々としてはもちろん協力を惜しまない。しかし、コリブリ学生の発表はコンクールの枠内で行われるのが望ましい。そのほうが、一般に向けてのインパクトがある。イベントが2日続けば素晴らしい。このような相乗的な協力関係はたいへん喜ばしいことである。

◆2016年度の新企画について：日本へ出発する前日に、学生のための一泊研修を組織する。交換留学参加学生全員が出発前日にパリに集合し、パリ日本文化会館を会場にしての研修を受ける。この研修目的は日本での留学に出発する前に、もう一度全員でコリブリ精神また諸事項について確認することである。この研修により学生たちの各種情報の認識の一致を図る。また学生同士の交換もできる。全員一緒に夕食を取り、翌朝バスで空港へ向かう。これにより、地方から来る学生の問題、遅れる学生の問題が解消されるという利点がある。このプロジェクト実施のため、日本語の企画書予算書を作成し、国際交流基金に申請したところ、申請額全額を助成してくださるとの知らせを本日受け取った。

上記新企画についての質疑応答

Q:誰が学生の監督をするのか。

A:ボランチアの教師たち。

Q:教師も参加できるのか。

A:もちろんだが、地方から来る教師の場合の交通費については現在のところその予算は見込まれていない。

Q:このような研修をしてほしいとの希望があって、企画したのか。学生たちは既に選ばれている学生達であるし。。。フランス人の学生たちが日本滞在中で問題を起こしているからなのか、日本へ行く前に学生たちが一緒にパリで一泊する必要があるのか？

A:この研修は日本へ行く前にパリ見物するためではない。自分の学校で個別に受けた情報でなく、もう一度全員一緒に各事項についての情報を確認する。一種の情報の調整である。空港で出迎えをする教師にとって、前日すでに学生全員が揃っており、空港へはバスで全員行くので、空港に遅れてくる学生の心配をするなどということがなくなるので、とてもポジティブな企画だと思うし、コリブリ交換留学旅行にさらなる価値をもたらす企画だと思う。

Q:地方の学生の交通機関は？

A:TGV または飛行機、両方可能。飛行機の場合はすでに旅費に含まれる。

Q:この研修の間、事故などが起こった場合の責任はどこにあるのか。レクトラに許可をもらうなどの手続きが必要か。

A:この研修はコリブリ交換旅行の延長であり、教育省の管轄ではない。場合によっては、コリブリ協会の名の下での保険を拡大するとか考える。

✓寺田真紀教諭の発表-1 「2015 年度コリブリ日本加盟校訪問 報告」

まず、須貝会長よりこの新企画の趣旨の説明をした。2015 年度の新企画としてコリブリ日本加盟校訪問を実施した。初めての試みで、ジュール・ゲード高校の寺田真紀アグレジエ教諭が担当した。昨年 10 月に学生とともに日本へ立ち、学生が各々日本の家族と学校で 3 週間の留学体験をしている最中、コリブリに加盟している日本の高校を訪問した。今回は関東関西地方の 11 の高校を訪問し、親善を図るとともに各校の各種情報を収集した。それら情報は今後の交流に大いに役に立つことであろう。

寺田教諭の報告はまずモンペリエのジュール・ゲード高校で教鞭をとっていると自己紹介から始まり、この事業実施に当たり助成金を下さったフランス国民教育省（DREIC）とパリ日本文化会館の資金援助に感謝の意を表した。次にこの事業の趣旨を説明。この事業の目的は日本の各校の校則など各種情報並びに受け入れたフランス人生徒に関する印象を収集し、フランス人学生の留学準備をより効果的に行うことにある。

この事業を始めるにあたって、まずコリブリ・フランス理事会とともに訪問校各校の情報を記入する調査票を作成した。その調査票をスライド表示をしながら、調査票の内容を順に紹介した（添付資料参照）。

本件の調査旅行は 2015 年度の 50 名の学生とともに 10 月 17 日に出発し、11 校を訪問、11 月 7 日に学生とともに帰仏した。この調査実施にはコリブリ・日本の中野代表に大変お世話になった。帰仏後、この 3 週間の高校訪問をまとめ、報告書を作成した。この報告書は日仏バイリンガルで、フランス語への翻訳に際しては、ナタリー・ルイエさんに大変お世話になった。この報告書は計 6 部作成し、コリブリ・フランスの須貝会長、コリブリ・日本の中野会長、フランス国民省（DREIC）、日本大使館、パリ日本文化会館にそれぞれ 1 部ずつ贈呈する。

次にスライド（添付資料参照）を表示しながら発表の本題に入った。まず、スライド資料の当プロジェクトの目的 3 点、次に訪問校と日程。今回は関東 8 校、関西 3 校と計 11 校を訪問。この 11 校の選択は理事会、中野代表と相談しながら決定した。来年以降もこのプロジェクトが続くならば、仙台、北海道、沖縄などの他の地域も訪問し、最終的にはコリブリ日本加盟校全部の情報が揃うことが理想的である。

さらに、記入された各校の調査票から「学校の特色」「制服」「校則」「生活の様子」

「時間割」「交流」などに関して訪問校（11 校）の主な情報をかいつまんで話された。発表はスライドに沿っているので、詳しくは添付資料を参照していただきたい。6 部作成した「報告書」には 1 校毎に写真、学校の説明書（制服の様子など）のコピー、時間割、コリブリの生徒に配るプリント、などを載せた。

尚、記入された各校の調査票には各校の貴重な情報が満載されており、教師にとって非常に有益且つ貴重な資料である。調査票を含む「報告書」は教師が見たいとき見ることができるように、コリブリのサイトの教師用イントラネットに載せることになっている。（注：この報告書はすでにサイトの <http://reseaucolibri-francejapon.org/wp-content/uploads/2016/06/2015-Rapport-des-visites-Terada.pdf> で閲覧できる）

質疑応答

以下コリブリ交換留学についての諸々の質疑応答をテーマ毎まとめた。

フランスの高校についての調査票について

Q:フランスの高校に関するこのような調査票を求める日本の高校があるか。

A:フランスの高校はほとんどが公立なので、日本ほどの違いはないと思うが。日本は各校の決まりが本当に違う。私立高校を選んで調査票に答えてもらうとかの方法もあるかもしれない。

日本側の新しい加盟校について

Q:日本側では、新しく加盟する高校があるのか。

A:今年2校加盟した。東京国際高校がその一つ。

Q:自分は個人的にコリブリに加盟していない日本の高校を知っているが、我々教師がそれらの高校に個人的にコリブリに加盟するよう働きかけるのはどうか。

A (中野代表):日本の高校の教師はすでに非常に仕事が多い。また、コリブリに加盟すると、空港での迎えなどなどなど、非常な労力が求められる。コリブリに加盟するということは故にかなりハードルが高い現状だ。

校則に関して

Q:校則に関してだが、ピアスとか髪の毛染めとか、どうでしょうか。

A:学生にははっきりダメと言ったほうがいいのではないかと。毛染めに関しても、自分は染め直させた。

日本人学生のための時間割について

Q:日本ではフランスの学生に合った特別な時間割を作っているようだが、フランスではどうしているのか。

A:特別な時間割は作っていない。が、哲学の時間が8時間とか経済の時間が8時間あるとかいった週は、適当なほかのクラスに入れるとか、自分の日本語の授業があるときは、自分のクラスに入れるとかしている。

A:フランス人生徒の普通の時間割は日本人学生には難しい。特に今年はフランス語が全く分からない日本人生徒がいたので、日本語のクラスに入れて、日仏語交換授業を行った。または、フランス人パートナーの授業と一緒に出させた。または、図書館で自習させた。

A:自分の生徒は理工科系だったので、授業はどうしても理工科系。日本人パートナーはむしろ文系とか音楽家だったので、文系の授業に出させた。校長にそのことを話したら、ピアノの部屋があるので、好きな時ピアノ室へ行っていいとってくれた。また、高校には音楽コースもあるので、そのことを事前に分かっていたら、その分野の授業を受けるということも可能だが。調査票にその高校の授業の特徴、理系、文系、スポーツ、音楽などのことも記入したらどうか。また、日仏学生のパアを作るとき、理系、文系、芸術系などを考慮してパアを作ったらどうか。

A:自分の高校では、まず第一週目はパートナーと同じ時間割に従い、2週目から必要に応じて時間割を変更している。

A:自分も時間割を少し変更していた。自分の日本語のクラスに来させたら、日本へ行けなかった生徒たちはとても喜んだし、そのことが生徒たちのモチベーションとなった。また、音楽の授業にも出させた。また、学校の近所に移民者たちのためのフランス語コースがあったので、そこに出席させたこともあった。フランスの場合の時間割は、校長により、教師により、一律ではない。

日本人学生の送迎パーティーなどについて

Q:日本人学生の送迎パーティーに関して、各校はどのような形でしているのか。

A:自分の学校では、他の国との交換学生がいるので、それら学生達と合同で行っている。

A:まず校長室で校長が迎える。帰国前にクラスメートまた学校の管理職の人も加え、1~2時間、写真を撮ったり、学校が用意した免状を渡したり、形はいろいろあると思うが、要するに、ことの重要性を強調する、また記念になるようなことをすると思う。

A (中野代表):日本側では、学校に対し、こんな国際交流をしているというアピールの場として交流会みたいのをなるべくやるようにしている。学校としても理解してくれると、予算も出してくれるとかの利点がある。それを利用するようにと日本では言っている。フランスでも、日本との交流をやっていますよという感じで、一般の生徒も全員参加できる、あるいは保護者なども含めてやるようにするとよりコリブリのプレゼンスが上がっていいのではないかと思う。

コリブリ交換旅行のステータスに関して

Q:このコリブリ交換旅行なのだが、これは学校が組織するものではなくただ仲介役を務める。これはむしろプライベートな学習旅行と言える。学生の頭の中にはあいまいさが残り、学校の日本旅行と混同されやすい。

A:来る10月、学生の日本出発の前日に行われる研修会で、この交換旅行はコリブリが組織するのであることを明確にする。

A:学生と家族の説明会の時、旅行という言葉を使わないようにしており、交換プログラムであることを強調している。学生や家族が旅行という言葉を使ったとき、いや、これば「Club med.」ではなく、交換旅行であり、3週間日本の高校へ勉強しに行くのだ、と訂正するようにしている。

A (須貝会長):コリブリ交流プログラムは学生ばかりでなく、家族も当事者であることを認識させることが重要である。この事業は学生たちがフランス或いは日本の家庭生活、高校生活を3週間経験することにある。学生もフランス或いは日本での真の生活を体験する心構えが必要であるし、家族も均衡のとれた日常的家庭生活を提供することにある。学生受け入れはお金を使うことではない。東京、京都、奈良、パリなど観光するより、地方都市の真の日本、真のフランスを体験させたほうがより豊かな経験になると思う。

交換留学中のリスクに関して

Q:コリブリはアソシエーションである。もし、交流滞在中に事故が起きた場合、責任はどこが取るのか。

A (須貝会長):学生たちには旅行保険が掛けられている。日本人学生が携帯を盗まれたことがあるが、このような場合は保険が利く。コリブリの責任に関して、コリブリ・フランスの保険会社はGMFで、リーズナブルな範囲で保険が掛けられている。例えばボランチャには掛けられている。コリブリの予算も増えているし、保険の保証範囲を広げることも考えられる。しかし、すべてを保証するという事は不可能だ。

A (中野代表):日本の場合は交流の前、「旅行中不測な事態が生じる可能性があることを承知しつつ、コリブリ交換事業の意義に賛同し子供が参加することに同意する」といった証文に学生の両親たちは署名しなければならない。それが問題解決になるのかどうかは分からないが。

A:自分の学校でも、アソシエーションでも、いつもこのような証書に親が署名するという方法を取っている。

A:学生受け入れの責任者として、日本学生がいる3週間、いつも不安を感じている。

A:学生の旅行に引率していた教師が旅行中起きた事故のため自殺した例もある。彼が法的な責任者であったわけではないが、そのような場合、教師は責任を感じないわけにはいかない。

A (須貝会長):事故が起きた場合はコリブリ・フランス会長の自分が責任を取る。6月か7月に理事会を持つので、その時、保険の契約さらにサインさせるべき書類などに関して検討する。

Q:危険だからディズニールランドに行かないで欲しいといった日本の家族の要望について。

A:フランスの受け入れ家族を信用して欲しい。マルセイユの場合、リールの場合と、危険はどこにも転がっている。

A:逆にニューカレドとの交流で、子供を仙台に送らない、仙台の学生を受け入れないといったニューカレドニアの家族の問題があった。多少のリスクは受け入れるべきだし、リーズナブルにことを判断すべきだ。

A:教育省のパンフレットには、学生を一人で買い物させてはいけない、道を一人で渡らせてはいけない、などなど書かれている。すべてを守っていたら、何もできない。

A:仙台の高校に配属された学生の親が不満だったが、学生が日本へどうしても行きたいということで、親も結局承諾した。学生も親もどこに配属されようとどの高校に配属されようと、受け入れるべきだ。地震はどこで起きるかわからない。

A:コリブリ加盟校を信用すべきであるし、学生もその家族も選ばれているのだから、信用すべきだ。

Q:日本の家族や教師が、どこそこへ行かないでほしいということがあったら、それを守ることが規則となるのか。

A (須貝会長):いや、そうは思わない。

交流事前の日本とのコンタクトについて

Q: 交流事前の日本とのコンタクトについて、皆はどのようにしているか。

A: 基本的には相手の高校の先生とやり取りするべきだと思う。そうすると、相手の先生は体育の靴をもってきてほしい、定期を買うのに写真がすぐ必要だから、証明書用の写真をもってくる、制服のサイズを教えてほしい、などなど必要な事前の準備ができる。

A (中野代表): 日本側としては、加盟校全員の先生方にはフランス側の先生と連絡取るよう、おねがいしている。が、それがどこまで実行されているのかはしっかり把握していない。フランス側はどのようにしているのか、知りたい。日本側は、常識としてお世話になるのでよろしくお願ひしますといった連絡を一言すべきだ、という感覚でやっている。また、何か必要なものがあるかとかは必ず聞くように指示している。生徒同士だけでなく責任者として教師も聞くようお願いしている。

Q: 事前に相手の先生とコンタクトを取るように言われたので、取るのだが、相手から全く返事がなく、問題が起こっても最後の最後によく連絡が来た。

A: それは学校によって先生によって違う。きめ細かに連絡してくれる先生もいるが、そうでない先生もいる。

A: フルタイムの先生と非常勤の先生がおり、非常勤の場合、数校掛け持ちでやっており、その場合、コミュニケーションが滞っているという感はある。

A (中野代表): 連絡しても一向に返事をくれないという日本の教師がいたら、自分にその旨知らせしてほしい。自分から個別対応をお願いするようにするので。

空港への送り迎えについて

A (中野代表): 日本側は空港への送り迎えは家族にとっても教師にとっても義務である。つまり年4回空港に行かなければならない。これは大変厳しい。ここまでする必要があるかは別として、これが決まりである。

A(須貝会長): フランス側は来ることができる教師と家族が送り迎えする。今まで、それで大きな問題もなく済んでいる。

A (中野代表): 日本側からの提案として、どの教師とどの家族が空港に来るのか、そのリストをできれば3週間前、少なくとも2週間前には教えてほしいのだが。何しろ、今回起きたようなこと（ラロッシュェル滞在の日本の一学生は家族がパリの空港に迎えに来ていたと思ったら、実はボルドーの空港だった）がないように万全を期したい。

飛行機の乗継をする場合について

Q:飛行機の乗継をする学生の場合のチェックインについて、乗継空港でもまたチェックインしなければならない。

A (JAL パック野上氏): エールフランスの場合、搭乗30時間前からインターネットチェックインができるし、搭乗券まで発券してくれる。それをすれば、空港の地上職員の気分には左右されるといったような問題はなくなる。

A: 日本ではそのようにするよう義務付けている。でも、徹底されているかどうかは把握していない。

飛行機内の座席について

Q:飛行機の中で学生たちは近くの席に座っているのか。学生たちが一緒に席にいるような具合にできないのか。

A (JAL パック野上氏): 今回は出発前に研修するので、あらかじめ誰が乗るのか分かるので、情報の管理が簡単になる。

A (JAL パック野上氏): 今年はいエアーフランスではなくずっと価格の安い JAL にした。そして、学生皆が固まって一緒にのところにいられるよう、一角をすでにブロックするよう手筈したので、問題ない。

入国審査用紙について

寺田: 入国審査の用紙だが、学生たちはどうしていいのかわからず時間を無駄にしている。出発前に先生が入国審査の用紙について学生に一言説明しておくといいと思うが。

フランス候補学生の国籍について

Q:候補学生はフランス人でなければならないのか。

A:ビザの問題、あるいは戦争などの問題のある国のほかは、フランス人でなくてもよい。

Q:写真を公開する件について、日本人学生の写真や資料をインターネットに載せてもいいのか。日本人学生は問題ないと言っているが。

A (須貝会長): フランスの場合はコリブリ活動の枠内でのイメージの使用の許可を親から取っているので、問題ない。

A (中野代表): 日本の場合も原則的に同様問題ないと思う。現時点ではその件に関して親の許可のサインはまだ取っていないが。

日仏学生のペアリングについて

Q:日仏学生のペアリングだが、どんな具合になされているのか。語学のレベルでペアリングしているのか。自分は高3の生徒をいつも送っているが、日本の場合、第2外国語の場合は高2から学び始めるようだが、どこでもそうなのか。フランスに来る日本の学生は最大2年間のフランス学習をしているのか。いつも日仏学生の語学レベルが非常に違うが。

A (須貝会長): 語学レベルの違いは問題ない。日本の学生のフランス語レベルが低い場合、パートナー同士が仲が良ければ、日本の学生にフランス語を話させるよう助けてあげればよい。日本では白百合とかカリタスなどでは、フランス語をLV1で学べる。その場合は学生の語学力は高い。LV2は高校から始める。

A (中野代表): コリブリ創始者の橘木先生がペアリングをしている。ペアリングの一番重要な基準はアレルギー、次は、例えば東京の学生はできるだけ地方都市に住んでいる学生とペアにさせる、3番目は趣味と人柄、4番目に語学力となっている。語学力が重要であれば、橘木先生に話す。。。

→コリブリ交流のための学生の選択に関してサイトに説明が載っている。問題があるときには須貝会長まで連絡してくるよう。

✓寺田真紀教諭の発表 -2. 「2015年度コリブリ-日本総会に出席して」

この会議用の詳しい議題が作成されているので、フランスに関係する点についてのみお話しをする。当総会は2016年1月6日13時より17時まで暁星高校にて教師・関係者計31名の出席にもと開催された。

・フランス大使館からのお知らせで、エール・フランスのコリブリ日本に対する教育支援は経済的な理由からなくなる。

・コリブリ日本のサイト作成中

・コリブリ-ニューカレドニアサイトとのリンク作成中

・2015年度の短期受入れは特に問題はなかった。

・日本出国の際、仏学生も日本学生もチェックインを先に済ませてほしいとのこと。

(ちなみに、仏出国の際は先ほど話が合ったように、インターネットチェックインでいいと思う。)

・仏学生日本滞在の1週目は日本の高校では中間考査にあたり、その間、仏学生の対応をどのようにするかという問題について、パートナー生徒が面倒を見られない場合は、その家庭がパートナー生徒に代わって世話をする。学校では各学校に任せる。対応例として、教師が校内を案内したり、例えば、中学校のフランス語の授業に参加させるとか、家庭科の教師が面倒を見るなど、他のアクティビティーを計画する。あるいは図書室での自習、教師が日本語の授業をしてあげる、など。他に模造紙に自分の町や高校の紹介をあいっている時間に書かせて、その紹介のプレゼンをやらせる。それに関して、フランス人生徒は自分の街と高校のプレゼンを是非用意してきてほしい、もしそれが時間的にできないなら、日本で時間があるときできるように写真などを準備して持ってきてほしい。

・ニューカレドニアとの交流では、今まではLV2の学生のみであったが、今年度よりLV3の生徒も来るようになった。

・年間カレンダーに関して、フランス側は早めに参加生徒の情報がほしいのは分かるが、日本は4月に新学年なので、参加生徒の選抜が大変困難なのが現状。その解決策としては4月に入学する生徒には難しいのだが、現高1生徒には3月にコリブリについての話を始めて、例えば、3月に渡仏した生徒の帰国報告を兼ねて、3月の間に留学生の説明会を開催するということを言っていた。

・パリのテロ後の状況について、日本人生徒は外務省の旅レジに登録するとか、昨年1月の後にはフランス側が日本人受け入れに不安があるか聞いてもらい、文科省に問い合わせ、学校判断、家庭判断で行くかどうかを決めるということ。今年も家庭判断で決めてもらうが、強要はしない。例えば、他の時期に行くのだったら、それはコリブリの交流ではなく、個人的な交流になるので、コリブリの交流としては、秋と春しかない。

・寮生を受け入れるかどうか、これは現在では難しいので、今後の課題とする。

・日本人の生徒が少なく、仏人生徒が多いが、これも現状では解決は難しい。男子女子のミックスの組み合わせが考えられるが、これも難しい。

中野日本代表：

・総会の議題の一つとして、マリワナの問題で、フランス人学生本人ではなくて、弟が吸っていたという問題があった。日本では何ら区別なしにすべて麻薬としてしまい、この問題については過剰反応を示す社会である。学校においては特にその傾向が強く、それをもっているだけでも逮捕退学と非常に厳しい措置が取られる。この点をお伝えしたい。

・フランス人学生のフランスについて或いは自分の街についてのプレゼンはとてもいいので、日本人学生もフランスでそのようなプレゼンをやる機会があるといいと思っている。

・日本の教師達からの要望：特に危機管理のためニューカレドニアの空港に着くと、ニューカレドニアの受け入れ生徒と日本の生徒の携帯番号リストなどが配られている。日本の先生方からフランスの先生方へのお願いなのだが、各学校で、来る生徒のリスト、受け入れる保護者のリスト、それから先生のメールアドレスと携帯番号を作っていないものだろうか。というのは、パートナー同士は書類からすべての情報が共有されているが、例えばマジジャンディー高校に来る日本人学生たちはほかの日本人学生の情報は何もない。

✓コリブリのサイトについて

Victor Decroix 氏のお蔭で、立派なサイトがある。それを定期的に更新していかなければならない。資料をサイトに載せる作業などをしてくれる候補者がいるといいのだが。教師用の INTRANET がある。また日本のページも付け加えられ、すでに日本の資料が載っている。

✓「若者 G7 に参加するコリブリ学生の選抜」について

当時教育省の責任者であったメルカ氏よりの要請により、若者 G7 に参加する、英語でディスカッションのできる優秀な学生を選抜するよう、コリブリメンバーにお願いした。そして、どれも優秀な 18 名の候補学生がいた。その中で 4 名を選んだ。状況が状況だけにそれらの氏名の公表は控える。その間、教育省内部に人事交代があり、メルカ氏が他のポストに任命された。他方、教育省内部の他の人が他の学校に学生 4 名を選抜するようにコンタクトし、結局、このルートで選抜された 4 名の学生が最終的にフランスを代表することになり、コリブリ代表の 4 名は取られなか

った。この件ではコリブリメンバー全員が真剣に取り組んだが、このような結果となった。このようなことは2度と起こらないことを願う。DREIC 次官のレニョー氏がこの研修会に出席してくださっている。教育省としても今回の件の重要性を認識しているのだと思う。後ほどレニョー氏にご挨拶いただくので、この件についても触れられるであろう。また、コリブリは教育省に呼ばれ、会合を持った。選ばれた4名のコリブリ学生がフランス代表として日本へ行く機会があることを願うばかりだ。

✓寺田真紀教諭の発表 - 3. 「イノベーション教育ネットワーク Inovative Schools Network」

10月30日に中野コリブリ日本代表と一緒に早大学院で太田環氏に会い、OECDの「日本イノベーション教育ネットワーク」について話を伺った。まず、この組織は事務局が東京大学の公共政策大学院内にあり、大学、自治体、企業、中学高校と産官学が一体となって事業を進めるコンソーシアムである。その第一のプロジェクトが「東北スクールプロジェクト」で、東北地方から100人ぐらいの中高生の参加のもと、2年間半この東北の魅力を世界にアピールするというイベントを開催、2014年にはこの近くのエッフェルタワーのところで東京のフランス大使館並びにOECDからサポートを受けてプロジェクトのゴールとして、イベントを行った。

そして、当組織の第2のプロジェクトが「地方創生イノベーションスクール2030」である。このプロジェクトは日本の中高生とほかの国の中高生が一緒になって2030年にあるであろう問題をどのように解決するかというのをプロジェクトとして、進めて行く。例えば、高齢化、人口減少に対応するためのスキル力、環境問題、再生化のエネルギー防災に関すること、対応性グローバル社会とどう対応していくか、そういうことに関するプロジェクトを組んで、最終的には2017年の夏に東京で東京国際ラウンドの会議を開催して発表する。今のところ、国としては、ドイツ、アメリカ、フィリッピン、トルコ、カナダ、シンガポール、フランス、エストニアの参加も模索している。なかなか興味深いプロジェクトだと思う。興味のある方はこのサイトを参考にして、太田環氏に連絡してほしい。尚、このプロジェクトは既に始まっている。関心がある方は、早めに連絡を取ること。(参考資料参照)

✓石井陽子氏による「バカロレア後の日本語学習継続の可能性」についての発表

この発表は日本語教育を行っている高等教育機関と学校外教育機関並びにそれらの教育課程の紹介であった。(http://reseaucolibri-francejapon.org/japonais-apres-baccalaureat/)

✓自治体国際化協会パリ事務所の荒井陽一所長が研修会後半にいらっしゃり、JETプログラムでフランス語教師としてフランス人を日本のフランス語教育をしている学校に送りたいとのこと。中野日本代表とお話ししたいとのこと希望。

✓日本大使館文化広報部一等書記官、大川晃平氏のご挨拶

DREIC レニョー副局長および中等日本語教育の振興に貢献している研修会参加者へ敬意を表した後、2013年にオランダ大統領の日本訪問の際、安倍首相との共同コミュニケでも2国間特別パートナーシップの枠内でコリブリが挙げられたが、貴ネットワーク活動が日仏2国間における日仏語教育の強化を促進し、コリブリ交流若者が2国間の交流また様々な分野での事業の発展に貢献することを期待する。日仏2国間特別パートナーシップでは、日仏語教育の重要性がうたわれている。この機会にフランスにおける中等日本語教育について以下の3点について述べたい。

フランスにおける日本語学習者数は1980年代よりヨーロッパにおいては第1位を占めており、その数は継続的に増加している。また、日本語教育はフランスの教育システムに完全に導入されていると言えると思う。2012年度のMCJPの調査によると、中等教育での日本語学習者は4500名を数えている。教育外の機関で学んでいる学習者はこの数に入っていないので、実際にはそれ以上の若者が日本語を学んでいることになる。

しかし、日本語の問題は学習希望者という需要に対して日本語の授業実施という供給が追いついていない状況が生じている。すなわち、日本語を学びたいのだが、学ぶ場所がないという問題

を抱えている。つまり十分な数の日本語のクラスが存在しない。特に地理的に日本語のクラスが実施されていない地域がある。

また、近隣地区で教えている教師が隣の地区へ教えに行くという問題や、質の確保された日本語教育を実施する教員の配置の問題がある。仏の教育制度、特に教員資格の制度を拡充する段階にある。今後は制度としても質の高い日本語教員の数を増やしていかなければならない。そして、単に日本語を学ぶだけでなく、日本語を使って活躍できる、そのような教育を目指す必要がある。これらの課題を解決したならば、日本語学習者の数はさらに増加するであろう。

日本語教師の皆さま方が日々努力なさっていることに敬意を表する。今回 INALCO にて日本語教師養成講座マスター2 が開講されたことは大変時宜を得た措置である。日仏特別パートナーシップが皆様の努力を効果的に支援することを祈る。コリブリの活動は日仏教育にとって非常に重要なものであることは言を待たない。更なる発展をお祈りする。(大川書記官のスピーチの仏語の書き起こしが本報告書の最後に掲載されている。Le texte intégral de l'intervention se trouve en fin de compte rendu.)

✓フランス国民教育省国際協力関係局(DREIC)副局長レニョー氏のご挨拶

2015年にDREICの次長に就任したので、この研修会には初めて出席する。さらにDREIC内では人事の変更があり、特に部長クラスに変動があった。只今、大川書記官のご挨拶があったが、大川氏も昨年在仏日本大使館に着任された。2015年11月のユネスコのイベントとCOP21の折、文部科学大臣がフランスに訪問した際に、日本大使館とは密度の濃い交渉があった。仏教育省と日本大使館は日本における環境教育の日本のエキスパートをフランスに招待することに成功。このように両国間のダイナミックな関係が樹立したと思う。さらに、ベルカセン仏教育大臣が5月に日本で行われるG7-教育サミットに出席する。その際、仏教育大臣は日本の文科大臣と再度話し合いをすることになっている。日本におけるフランス語教育並びにフランスにおける日本語教育の問題は2015年11月にもすでに検討されたが、五月の会合でも再度話し合われることになっている。11月の両大臣の会合に立ち会う機会を得たが、双方とも言語教育の協力を強化する意思を表明している。というのは1990年代には日仏間の言語教育協力はとても盛んであったが、その後、世界情勢は変わり、フランスでは中国語、韓国語などのほかのアジア言語の台頭、日本でもフランス語教育は後進している。1980年代にはフランス語は英語に続く2番目の外国語であったが、中国語、韓国語などに追い越されている。しかし、再度有利な状況になりつつある。両国政府とも言語教育協力を強化しようとする意志を強くしている。実際、フランスにおける日本語への要求は大きく、それに反して、日本語のオファーは十分でない。それは予算との関係もあるが。しかし、現状を改善するには日本語のコンクールを私設するということが必要かもしれない。近い将来日本語の視学官との話し合いも予定されており、また、G7-教育サミットで両国の教育大臣の会合もあり、現状改善に向けて具体的な提案の明るい展望がある。

大川書記官と同様、この研修会に参加できて非常にうれしい。コリブリネットワークは日仏共同声明でも言及されており、ささやかなネットワークだがエネルギーに発展している。故に、教育省は支援するし支援し続けるであろう。2015年に助成金を多少増加した。困難な現状ではあるが、来年度あるいは再来年度にさらに増加できるかもしれない。何しろこのネットワークがさらに発展するように、支援するつもりである。

先ほど須貝会長が言及したが、若者サミット参加学生の選抜の件では、非常に失望を与えた。DREIC内の部長クラスの人事異動、特にアジア・アフリカ部長の交代により、矛盾したメッセージが発信された。大変遺憾に思っている。それ故、須貝会長と石井陽子氏を教育省に迎え、話し合った。このミスをもどのように挽回できるか、日本大使館とともに選抜された優秀な学生に対して何かを企画するか、もちろん教師達も激励しなければならない、あるいはコリブリへの助成金を増加するか、どんな形でか挽回の機会を作るよう努力するつもりである。

また、コリブリ外のことで、日本語インターナショナルセクションはすでに存在しているが、2国政府間での正式な協定が未だ結ばれていない。が、この件でも、日本大使館と話し合いが進んでいる。

DREICは全世界との関係を担当しているのでなかなか難しいが、コリブリのよい評判はよく聞いている。今後もコリブリの活動に期待する。そして支援を惜しまないつもりである。(レニョー次

長のスピーチの仏語の書き起こしが本報告書の最後に掲載されている。Le texte intégral de l'intervention se trouve en fin de compte rendu.)

(報告書作成 石井陽子)

Mots d'accueil de M. Sugiura, Président de la MCJP

Konnichiwa.

Cher Professeur Aude Sugai, présidente des lycées Colibri France, cher Monsieur Shigeru Nakano, représentant des lycées Colibri Japon, cher Professeur Yoko Ishii, secrétaire général des lycées Colibri France, cher Monsieur AtsunobuNogami, représentant de Jalpak France, chers Collègues.

Bonjour, soyez les bienvenus à la Maison de la Culture du Japon à Paris ; je me permets de dire un petit mot avant de démarrer cette conférence des Lycées Colibri.

Comme vous en êtes au courant, il y a trois semaines, le 5 mars ici dans la grande salle du troisième sous-sol, nous avons organisé les présentations des élèves des lycées Colibri. Je suis très impressionné par le niveau très élevé de la capacité d'expression des jeunes élèves sélectionnés, qui nous ont raconté leurs expériences au Japon. A travers des cours de langue japonaise, nous mettons l'accent sur les jeunes générations, notamment sur les lycéens, parce que nous pensons qu'ils pourront être des ponts solides à l'avenir entre la France et le Japon. En même temps leur rôle est absolument indispensable pour la promotion de l'enseignement de la langue japonaise, ainsi que pour les échanges culturels entre la France et le Japon. Dans cette optique, j'admire les efforts inlassables et la coopération approfondie que les autorités et les responsables franco-japonais des lycées Colibri manifestent dans les activités des lycées Colibri. Je tiens à leur assurer que nous serons toujours à votre disposition. En signe de notre volonté, le président de la Fondation du Japon, Monsieur HiroyasuEndo et moi-même, nous voulons témoigner notre solidarité en vous remettant un certificat pour être membre de Sakura Network, JapanFoundationNihongo Network. Madame Kobayashi s'il vous plait.

Merci de votre attention.

Monsieur Okawa, premier secrétaire chargé des affaires culturelles à l'ambassade du Japon en France

Monsieur le Sous-directeur, et Mesdames, Messieurs, bonjour,

Konnichiwa ; Ôkawato to iimasu ; je m'appelle KoheiÔkawa, conseiller à l'Ambassade du Japon, je m'occupe de l'éducation.

Je suis très heureux d'être parmi vous aujourd'hui, à l'occasion de la journée nationale de formation pour les enseignants du japonais, membres du réseau franco-japonais des lycées Colibri, en présence de Monsieur Judaël Régnaud qui est sous-directeur des relations internationales à la DREIC du Ministère de l'Education Nationale, de l'Enseignement supérieur et de la Recherche.

Permettez-moi tout d'abord d'exprimer mes plus vifs remerciements à Mme Aude Bellenger-Sugai, et aussi Mme Yoko Ishii, et aussi tous les membres qui participent aujourd'hui pour contribuer activement au développement de l'enseignement de la langue japonaise dans le secondaire à travers les activités du Réseau Colibri. Comme vous le savez sans doute, ce réseau franco-japonais, ses activités ont été évoquées par Monsieur le premier Ministre Monsieur Abe et Monsieur le Président Hollande lors de la visite de ce dernier dans le passé au Japon. Dans le cadre du partenariat d'exception et entre nos deux pays, je suis

effectivement persuadé que votre activité est essentielle pour développer et renforcer l'enseignement des langues dans nos deux pays et former des jeunes qui participeront ainsi au développement des échanges et aux activités de recherche dans divers domaines.

Dans le cadre de ce partenariat d'exception, la France et le Japon ont mentionné la notion de favoriser l'enseignement et la langue aussi je me permets d'évoquer trois points au sujet de l'enseignement du japonais dans l'enseignement secondaire en France. Pour le moment, la France est le pays avec le plus grand nombre d'apprenants en langue japonaise d'Europe. Depuis les années 80 le nombre d'apprenants augmente continuellement. Nous pouvons donc aujourd'hui affirmer que l'enseignement du japonais s'est intégré dans le système éducatif français. Selon une enquête réalisée par la Maison de la Culture du Japon en 2012 il y aurait à peu près 4500 élèves apprenant le japonais dans les collèges et les lycées. Dans ce nombre n'est pas compris le nombre des élèves qui étudient dans des cours privés. C'est-à-dire que le nombre des élèves étudiant le japonais est plus grand.

Cependant il faut désormais améliorer une stagnation dont la raison principale ne semble pas venir d'un désintérêt pour la langue ou de sa difficulté, mais bien plutôt d'un problème d'accessibilité. Et ce sera mon second point.

J'ai entendu dire qu'il y a un nombre important d'élèves ne pouvant pas suivre des cours de japonais dans leur école bien qu'ils en aient exprimé le désir. Les raisons semblent variées et je n'en dresserai certainement pas une liste exhaustive mais je peux au moins dire cela : L'accessibilité au cours de japonais rencontre des difficultés d'ordre géographiques, du fait d'une absence d'offre dans certaines zones, des difficultés d'organisation parce que les emplois du temps ne permettent pas d'inclure les déplacements parfois indispensables pour se rendre dans les établissements avoisinants qui assurent ce cours, et bien sûr des difficultés quantitatives puisque l'offre est encore réduite, les classes de japonais ne pouvant pas accueillir tous les élèves désireux d'apprendre cette langue. Enfin il semble clair que l'enseignement du japonais souffre d'un manque d'enseignants qualifiés pour pouvoir assurer les cours de langue. Il est désormais temps de mettre en place les conditions qui permettront son essor dans le système éducatif français en offrant aux apprenants les conditions adéquates. C'est-à-dire non seulement pouvoir découvrir et apprendre la langue japonaise, mais aussi s'épanouir pleinement dans cette discipline ; si nous pouvions réduire, voire éliminer ces freins, je suis convaincu que le nombre d'apprenants de la langue japonaise augmentera en conséquence. Je sais que les enseignants font quotidiennement un travail considérable pour résoudre ces difficultés. L'ouverture d'un master 2 à l'INALCO donne vocation, porte tout particulièrement sur l'enseignement de la langue japonaise constitue un effort qu'il convient aussi de respecter. Entendez bien mon propos, je sais que vous faites déjà beaucoup ; j'espère simplement que le partenariat d'exception qui lie la France et le Japon amènera les institutions à soutenir efficacement votre action. Il est évident que votre réseau Colibri est un acte important de l'enseignement des langues japonaises et françaises ; je souhaite que les activités du Réseau Colibri se développent continuellement ; que vous puissiez bénéficier de plus de moyens.

Merci beaucoup pour votre attention.

Intervention de Monsieur Régnaut, sous-directeur des relations internationales à la DREIC

Bonjour à tous. Je suis très heureux d'être parmi vous pour la première fois, parce que comme Mme Sugai vous le disait. J'ai pris mes fonctions à la DREIC en 2015, l'année dernière ; cela fait juste un an. Il y a effectivement quelques changements au sein de la sous direction, en particulier au niveau des chefs de département. Je reviendrai sur ce point en fin de présentation.

Tout d'abord, je voulais saluer mon collègue, M. Okawa, qui lui aussi est nouveau dans ses fonctions. Depuis qu'il est arrivé à l'Ambassade du Japon, je dois vous dire qu'il y a un vrai échange entre nous qui s'est manifesté à plusieurs occasions, notamment à l'occasion de la visite du Ministre japonais de

l'Education au moment de l'UNESCO en novembre 2015, et au moment de la COP 21, puisque avec l'Ambassade du Japon nous avons permis à un expert japonais de venir présenter l'éducation au développement durable au Japon. Je crois qu'une dynamique positive s'est mise en place avec l'Ambassade du Japon. Sachez aussi donc que notre ministre Mme Vallaud-Belkacem se rendra au Japon pour le G7 en mai. Le G7 de l'éducation est aussi un moment important, puisqu'elle va à nouveau rencontrer son collègue Ministre, et effectivement tout ce qui est l'enseignement des langues de part et d'autre, le français au Japon et le japonais en France, était un sujet abordé en novembre 2015 par les deux ministres, et qui le sera à nouveau par les deux ministres en mai.

J'ai eu la chance d'assister à cet entretien en novembre, et effectivement je crois qu'il y a de part et d'autre une volonté d'amplifier notre coopération linguistique ; parce qu'on peut dire que c'était une coopération linguistique florissante dans les années 90 pour être réaliste. Et puis, le monde a changé, il y a eu de nouvelles langues asiatiques qui ont été enseignées en France, le chinois, le coréen ; de la même manière au Japon le français a perdu un peu de place. Dans les années 80, le français était la 2^{ème} langue vivante, je crois, la plus enseignée. Aujourd'hui, le français est concurrencé par le chinois voir le coréen. Donc, voilà le contexte. Mais, je crois que nous sommes dans un contexte positif ; il y a des efforts à faire, on peut faire mieux, mais je dirais que les autorités nationales de part et d'autre, la France et le Japon, sont très volontaristes là-dessus. Je retiens effectivement l'idée qu'il y a un enseignement du japonais très demandé et une offre n'est pas forcément ... ; nous en avons parlé avec Mme Sugai et Mme Ishii. On avait parlé d'une offre qui n'est pas forcément à la hauteur pour des raisons de contrainte budgétaire, mais aussi peut-être d'ouverture de postes dans les concours par exemple. Donc, là aussi je tenais à vous dire que nous allons bientôt avoir une réunion avec l'inspection générale de japonais. On va avoir dans la perspective du G7 de l'éducation une rencontre bilatérale aussi entre Mme Belkacem et son homologue ; on verra si on a des propositions concrètes pour aller un peu plus loin.

Comme l'a dit M. Okawa, Je suis très heureux d'être ici parce que le réseau Colibri est un réseau qui fonctionne bien. Il est toujours mentionné dans les rencontres bilatérales, et comme dispositif il est modeste mais très vivant et se développe. Donc le ministère le soutient et on continuera à le soutenir. On a augmenté un petit peu la subvention en 2015 mais j'entends que, avec le contexte, on pourra aussi essayer de faire un effort supplémentaire si ce n'est en 2016 en 2017, et avancer aussi pour continuer à promouvoir ce réseau.

Je ne veux pas être trop long, mais disons, sur l'histoire évoquée par Mme Sugai, je sais qu'il y a une émotion, une déception pour la sélection du Sommet des jeunes. Alors, je ne vais pas faire mon autocritique ; effectivement le fait qu'il y ait un changement au sein de ma sous-direction au niveau du chef de département Asie, a pu susciter des messages contradictoires, J'en suis profondément désolé ; pour cela on a reçu Mme Sugai et Mme Ishii au Ministère pour essayer de voir, de pouvoir comprendre déjà ce qui s'était passé et essayer de voir ce qu'on peut faire, ce qui serait bien. Par rapport à la procédure de sélections qui a déjà eu lieu et à ces bons dossiers, est-ce qu'on ne peut pas une cession de rattrapage, pas évidemment dans le cadre du Sommet des jeunes. On pourrait voir peut-être avec l'ambassade du Japon ? je ne sais pas ; si l'on pouvait faire partir ces élèves au Japon, ou à travers l'augmentation de la subvention, si ce n'est cette année, peut-être l'année prochaine ? Comment ces élèves pourraient être aussi récompensés s'ils ont été sélectionnés et bien sûr les enseignants qui les ont encouragés à se présenter. Donc on va essayer de voir des choses de manière positive, et voir si l'on peut faire un effort là dessus. Et enfin je voulais simplement terminer sur les dispositifs que le Ministère soutient en dehors du réseau Colibri aussi, vous savez, beaucoup les sections internationales de japonais ; et nous avons le projet avec l'Ambassade du Japon et le Ministère d'essayer de conclure avec le Japon un arrangement administratif afin de formaliser ce dispositif de sections internationales qui existe mais qui n'a jamais été vraiment formalisé. Il y a eu des échanges de lettres mais il n'y avait pas eu d'accord de ministère à ministère comme il en existe avec les autres pays avec lesquels on a ce dispositif de sections internationales. Voilà donc, j'aurais été très heureux de venir plus tôt, mais malheureusement j'ai la charge de trois continents, donc pas toujours facile de passer l'un à l'autre. J'ai entendu dire beaucoup de bien sur ce réseau. On va continuer à suivre avec beaucoup d'attentions. On espère pouvoir augmenter nos contributions pour les années à venir. Merci beaucoup.

(Transcriptions faites par Aude Sugai)